

1998年度 京生研基調提案

京生研研究部 文責：藤木祥史

—今の子ども達の発達要求にこたえる

集団づくりを進めよう—

1. はじめに

かつての校内暴力期（70年代後半～80年代前半）は、戦後学校教育の最大の危機としてマスコミがとりあげ、日本社会を揺るがす事態であった。

今、我々が直面している状況も、日本社会を揺るがす事態としては、肩を並べる事態となっている。

京生研は、校内暴力期に生まれ、子どもの荒れの中で鍛えられ、その成果を集団的に明らかにしつつ、事態の間を生き抜き、今、目の前の事態を切り拓こうとしている。多くの教師が悩み、苦しみ、真剣に教師として何ができるのかと苦悩する今、京生研の総力を挙げて指針を出していくことが、使命であり、かつ、存在意義でもある。

昨年度の基調は、急激に広がりつつあった小学校の荒れを取り上げ、京都の状況をもとに、荒れるすじみちとそのメカニズムの分析を試みた。その状況は確かに京都のみならず、全国的状況として、様々な場で取り上げられていったが、折しも昨年度大会中に、神戸における児童連続殺傷事件が中学生の犯行であったことが報じられ、その後、中学生による事件が連続した。

もはや小学校に限定される状況ではなく、子どもの発達上、重大な状況が広がっているというとらえ方が必要となっている。この状況を分析する上で、京生研の歴史は、校内暴力期を起点として子どもを分析し実践を探り出そうとした歴史であることから、京生研の研究の流れに即して分析してみようとした。

2. 校内暴力期をどうみるか

〈なぜ校内暴力が吹き荒れたのか〉

60年代能力主義政策は、中学校を、進路をめぐる選別の場と変化させていったが、70年代のオイルショック以後、中流意識の危機を感じた親の不安は、学歴志向を強め、大学進学率の上昇にともなう高校進学率上昇、普通科志向が強まった。それは、それまでの上からの能力主義を下から補うものとなり、一元的能力主義へと導くものとなった。

学校は学力（受験知）競争が激しくなり、乱塾時代を登場させていったのである。学校が偏差値競争の場へと変化する中で、子どもたちの抑圧感が強まり、低学力に苦しむ子どもたちを中心に荒れが広がり、やがて校内暴力へと発展していったのである。それは受験色に染まった学校に対する無自覚な変更要求を含むものであり、行動化しはじめた子どもたちは、ツッパリ文化を背景として学校に対峙し、学校秩序を崩壊させ、ツッパリ文化を商業主義が煽り、多くの生徒も同調的に校内暴力事態の中に巻き込まれていったのである。

〈校内暴力の中で広がる子どもの問題〉

竹内常一は、「個々の非行・問題行動は一見バラバラのように見えながら、そこには一定の問題傾向群、問題症候群があり、それをつうじて一定の性格がつけられている。」といい、その性格とは次のようなものであると述べている。「自分本位的性格ないしはナルチチズム的性格であり、それは状況の悪化とともに攻撃的、破壊的性格へと、さらにはファシズム的性格へと進化していくものである。」（『生活指導』1981年12月臨時増刊号「非行・

校内暴力克服の視点とすじみち」)

もう少し引用する。

「自分本位的性格とは、(1) 自分以外のことにはまったく無感動、無関心である。(2) しかし、自分本位的な欲望は絶対視し、その実現を自分本位的に追及する。(3) すべてを自分の都合のよいように解釈し、自分に不都合なことは認めない。そのため客観的かつ主体的認識ができない。(4) その行動は、一面は衝動的で、弱いものに対して支配的であるが、他面では、自閉的で、強いものには服従的である。このような自分本位的性格にとっては、自分だけが存在し世界や他者は存在していない。しかし現実の生活では、他者や世界は否応なくかれに参与してくる。このためにかれは(1) 外部に対して自己閉鎖し、うつ状態に入り、自己破壊的となるか、(2) 他者と世界を敵視しこれを攻撃、破壊して、自分に隷属させようとする。つまり、自他への攻撃性、破壊性をつよめていく。

自分本位的性格の広がりの中で、子どもの人間関係は、一方に、なれ合い、甘えを軸とする身内関係(共棲的關係)を生み出すとともに、他方に、自己閉鎖と敵意を軸とする他人関係を生み出す。教師との関係においても、自閉と敵意によって教師に対して見えない壁を立て、その内側になれ合いと甘えの人間関係をつくり出し、差別的なプレーの空間をつくり出す。

しかし、攻撃性、破壊性の登場とともに、その身内関係は、支配・服従、差別・被差別関係を強め、そこに、サド・マド関係とっていいような、迫害・被迫害関係をつくり出す。そして、そこに軍隊組織に似た番長組織をつくり出す。他方、その他人関係は、自閉と敵意から排外的行動へと移行し、スケープゴートに対する迫害をくりひろげるまでになる。それにつれて、教師に対する自閉と敵意も衝動的反撃から計画的反攻へと移行する。」

このような校内暴力状況に対し、管理強化によって鎮静化させる傾向が主流であった。それは警察権力の導入、連携による鎮静化と、再び起こることをふせぐための、校則による管理、ツッパリ文化の弾圧、そして、統一指導の徹底の方針のもとに体罰の横行するハードな管理と、受験体制の確立による囲い込みによって、鎮静化を進めたのである。

〈鎮静化した学校と子どもたち〉

校内暴力期における、子どもの自分本位的性格の広がり、それによってつくられる子どもの人間関係は、鎮静化とともに改善をしたのだろうか。鎮静化の中で、学校は受験・管理体制が強化され、子どもたちは息苦しさ生きづらさを抱えつつ、その非行、問題行動は「反抗的なもの」から「撤退的なもの」へと変化し始めていった。受験・管理体制の学校から落ちこぼれる子どもは、学校から撤退し不登校となり、地域で非行、問題行動をくり返すことになり、校内は、学校から落ちこぼれれば人生から落ちこぼれると、必死で適応する子どもたちとなり、学校は、一元的能力主義と校則、統一指導による支配的秩序が浸透していったのである。

こうした支配的秩序による学校と子どもの関係は、子どもたちの人間関係に色濃く反映されることになり、異質排除のいじめ、学校的リーダーいびりのいじめなど発達段階ごとに発生するいじめ問題と、事態の中で発生する子どもの世界の荒れは、広い裾野で広がっていったのである。子どもの人間関係の中で広がるいじめ事態は、校内暴力期における荒れの中での心性や人間関係と同質のものであると同時に、いっそう一般化したものと考えてよい。

〈京生研の実践は、この状況の中でどう進んできたのか〉

京生研の研究、実践提起は、このような学校と子どもの問題の中であって、学校から撤退した子ども、撤退するであろう状況を抱え問題行動を起こしている子どもへの指導が、実践の切り口であるとしてきたのである。

それは、かれへの個人指導を集団指導のヘゲモニーの重要なポイントと位置づけたことによって生まれた視点であるが、かれがもつ集団への影響のみが重要であったのではなく、かれの息苦しさ、生きづらさは、他の子どもにも共通のものであり、かれの思いに共感し、かれの願いに共闘する教師の指導は、その営みに参加する子どもの世界をつくり出し、やがて、受験と管理体制の支配的秩序の下でつくられつづけた子どもたちの関係をぬりかえていくものとして構想したものである。（組織的実践の積み上げの過程であるが……！）

それは同時に、実践主体となる教師が、支配的秩序の学校的価値から自らを自由にするものでもあったのである。60年代能力主義によって上からつくられ、オイルショック以後に下から完成され、校内暴力期を経て強化された学校の受験・管理体制による支配的秩序に対して、教師自身が支配されず対峙するための方法としても意味のあるものであった。

3. 時代の転換としての子どもの変化をどうみるのか！

校内暴力期に関わることを長く述べてきたが、いまの小学校の荒れ、中学校をめぐる問題の分析を試みるためである。

結論的な仮説を提起することから始める。

いま小学校における荒れは、先にあげた校内暴力期に広がる自分本位的性格と、それによってつくられる人間関係の悪性化の進行による攻撃性、破壊性の広がり[と同様]であり、中学生に起こる事件の場合は、学校を撤退した子どもたちの関係性の中に広がった校内暴力期の番長組織的な身内関係の差別・被差別関係の中で発生する事件と、その関係性が他者に対する敵意として発生した事件の場合、もう一つは、学校にとどまり続けた子どもの中で、自分本位的性格が悪性化しつつ攻撃性、破壊性がバーチャルな世界で深まりながら突然現実の世界に浮上した事件、とみるものである。

〈小学校の荒れをどうみるか〉

自分本位的性格（心性）は、発達過程において、家族の交わり、地域社会、子どもの世界の中で、社会性の発達によってそぎ落ちていくものであるが、幼児期の自分本位的心性がそぎ落ちないまま少年期を迎える子どもたちは、自分本位的心性を抱えつつ仲間を求める欲求にさらされ、自分本位的に仲間を求めることになる。それは校内暴力期の人間関係のメカニズム同様、なれ合いを軸とした身内関係と自閉と敵意を軸にした他人関係となり、身内関係のコミュニケーションとしての商業文化を排除する学校文化に対し、自閉し敵意をもつことになる。この悪性化の進行が高学年において攻撃性、破壊性の表出となっているのではないか。

〈中学生の事件をめぐる〉

少年期において自分本位的心性が悪性化していくことなく過ごした子どもたちにとっても、豊かな少年期が保障されたわけではない。自分本位性を内包しながら学校秩序から逸脱せずに耐えつづけた子どもの中に、内包された自分本位的欲望をバーチャルリアリティーの世界で悪性化させつづける子どもが発生する。神戸の少年や黒磯のナイフ事件の少年

のように、なにかのひきがねが、現実世界での行動となっていくのではないか。

学校を離反した子どもたちのつくる人間関係は、自分本位的欲望の自分本位的実現の中で、すさまじくダーティーな行動となり、その身内関係もしくは他人関係の中で起こる事件が浮上している。京都市内の中学生殺人事件もこの関係の中で起こっているものではないか。

〈背景として考えなければいけないこと〉

子どもの荒れの中で広がる子どもの心性とその人間関係における問題は、校内暴力期のそれと同質のものとしてとらえつつ、悪性化させる要因としての背景の違いにこそ今の問題の特徴がある。その違いの最大のもは、日本政府の政策転換である。

世界経済の中で日本経済が生き残るために、企業にとって便利な国家としての道を歩み始め、企業の都合に合わせた規制緩和を推進し、新自由主義的競争を激化させている。この新自由主義は、その基本において「自己努力」と「自己責任」の考えをもつものであり、呼応してこれまでの終身雇用制を見直し、雇用形態を長期蓄積型、高度専門型、雇用柔軟型の三層からなる労働市場を追求し始めている。

経済界の動向に合わせ、教育改革は三層に見合う人づくりを展開している。それは、6年制中高一貫学校や飛び級制度にみられる一部のエリート育成を残しつつ、一方で、基礎基本の否定、能力に応じた教育の名のもとに、合校論の示す安上がりで国家主義的人づくりを中心にした公立学校をつくりだそうとしているのである。

このマクロな政策転換は次のようなミクロなレベルで子どもたちの自分本位性の進行をうながすものとなっている。

第一は、企業の生き残りに関わってリストラにさらされる親たちの中で、企業が求める「自己努力」と「自己責任」の思想を受け入れざるを得ない状況を抱え、親たちの中に新自由主義が浸透していることである。それは自らの生き残りに必要な努力を無制限労働・無賃労働として追及させられる生活の破壊と、子育てにおいても「自己努力」と「自己責任」を子どもに求め、子どもを強い抑圧の下に学習に追い込み、だめなら見捨てるという子捨て状態にしてしまう状況となっている。

また、これらの親の姿勢は、学校の公共性としばしば対立することになる。学校の集団的価値観と対立したり、親の手の内にある間は強力に要求するも、ひとたび親の指導を乗り越えると子捨て状態となり教師との共同がつかれなかつたりする。

第二は、子どもを商業主義のターゲットとして、子どもたちが商品文化の担い手にされる中で、とめどもなく物質的欲望をかきたてる状況は、学校を離反した子どもの世界でルールなき欲望の追求が進むことに現われている。それがボーダーレスに広がりつつある。

第三は、幼児期から少年期に至る発達条件である子どもの集団は、集団の内実を保障する時間と、身体的活動と自分たちだけの空間が失われ、商業主義に誘導された価値への同調的競争（かっこよさ、女らしさ、ファッション、ファッション的スポーツ）に変質させられることになっている。

第四に、新学力観による、やりたいことだけやればいい式の保育、教育の広がりも、自分本位性を増幅させるものとなっていると考えられる。

このように、政策転換が子どもと親の生活を変え、子どもの幼児的な自分本位的性格を強めているとすれば、それを悪性化させているのが、学校と子どもの関係だと考えられる。政府の政策転換は、学校のあり方の転換も同時に求めるものであったが、現場の学校は、70年代から80年代に出来上がった受験・管理体制をかたくなに守り続け、文部省が強

権的に偏差値排除を実行しなければならないほどになっていたのである。[にもかかわらず]今なお80年代の学校体制は色濃く残り、小学校では低学年における横一線をめざした教科指導と体罰を含む統制、中学校ではツッパリの排除と受験管理が存在している。このような学校秩序は、子どもの中に広がる自分本位的性格とその人間関係を変革することなく抑圧するものとなり、悪性を引き起こしていると考えられる。

〈京生研のめざすもの〉

いま、子どもたちは新自由主義政策に囲われながら、自分本位的心性をそぎ落とし社会性を発達させることができずに自分本位的性格を抱えている。一方で、少年期、思春期という発達の節目にさしかかる中で、自立要求の芽生えに発する仲間との結びつき、仲間と共に生きる世界を築きながら親から自由になることを求めるのである。この要求を疎外するものが自らのうちに巣づくった新自由主義であるらしいという自己矛盾の中に生きていくことをしっかりと見すえなければならない。

我々の指導は、70年代～80年代の学校から自由になりつつ、新自由主義に囲われた子どもの自分本位的性格とその人間関係の中に、新自由主義に対峙する共同の生活をつくり出し、「自己努力」＝「自己責任」の思想に代えて「相互援助」と「公共性の追求」を広げていくものでなくてはならない。

京生研の実践の中には、受験・管理体制の学校秩序を否定しつつも、子どもの新自由主義的発想を受け入れすぎて、先に挙げた子どもの自己矛盾を増幅させてしまい、子どもの発達要求を見失ってしまう実践も出ているように思う。この点において、今村実践が、子どもの文化を「問題はあってもひきつけるものがあるはずだ」と述べながら、学校に取り入れ、ひきつけるものの本質を教え発展させる意図をもった取り組みであることは重要な視点である。

〈研究、実践課題として〉

先に挙げたように、子どもの苦悩を、仲間を求める発達要求と、疎外する内なる新自由主義的価値の矛盾ととらえるならば、日々発生する子どもの崩れ、トラブル、事件に介入し、一人ひとりの中にある自己矛盾を解き明かしていくことを通して、真の要求と、要求実現を阻む自分本位的性格とその人間関係を変革する方針を示し、共に闘いつづけることが必要とされているのである。この意味で、京生研の、個人指導から集団指導への実践的姿勢に戻るものでもある。

この、課題を抱えた生徒への個人指導から集団指導へのすじみちを本筋にしつつ、仲間を求める要求を受け止め、仲間と連帯することの喜びを一時的なものであっても豊かに作りだしていく取り組みを多く体験させることは、本筋となる指導の展開を容易にしていることにもなる。この時の仲間と連帯する喜びをつくる取り組みは、決して自治的な指導にこだわらず、教師主導、教師の持ち味で作り出すものでもよい。自治の発展は、個人指導の中で読み開いた現実の関係性を変革する共闘的指導の中でこそ追求されるものである。

このように考えたとき、京生研の実践を新たに分析、位置づけなおすことが研究活動として必要と考えている。

○個人指導の集団指導・自治への発展として、藤木の「西ノ岡中における実践とその後の青年会活動の展望」「後野の豊里中の実践と学校づくり」。

○今村実践における「文化活動と核（「問題生徒」）との対話から自治への総合性」。

○連帯を経験させる「綾中における平和学習」「谷尻の授業実践」「滝花のクラブ実践」
などである。

今後、基調提案の課題を批判的にかつ主張を含んだ実践提起を全会員の力で進めてほし
いと考えている。
(文責 藤木)